

「でんきが築く豊かな未来」

秋田県立横手清陵学院高等学校 2年 千葉 優衣

2011年3月11日。あの日起こった惨劇により、私たちの日常が一瞬にして崩れ去った。誰もが、当たり前にくると信じて疑わなかった「明日」が見えなくなったのだ。当時、私は小学6年生で校内の大清掃をしていた。過去に経験したことのないような大きな揺れに驚愕し、電気が落ち目の前が見えなくて、何も分からないまま、ただただグラウンドに避難をした。3月の秋田は凍えるほどに寒かった。自宅に帰っても、電気が通っていなかったために、ストーブもエアコンも使えず、毛布などで暖をとり、暗闇の中でろうそくの火の灯りを頼りに、いつまたあのような大きな揺れが襲ってくるのかと怯えながらも、一晩を過ごした。次の日には、電気も水も使えるようになった。テレビ・ストーブ・部屋を灯す電気、普段はあって当たり前だったことが少しずつ戻ってきた。それとともに、電気のあるありがたさを痛感した。このような、悲惨な出来事が起こってしまったからこそ、電気のありがたみに気づけたのだ。

時は経ち、私は高校2年生になった。高校生になり、私は初めて携帯電話を手にした。今では、なくてはならないものであり、普段自由に使うことができているのも、電力会社の方々が日々電気を供給してくれているからであり、当たり前にあるものではないということを感じ、大切に使いこなさなければならないと思う。高校から自宅までの帰り道は、明るい光に照らされていて、家に帰れば、暖かな光が私たち家族を優しく包み込んでくれている。そんな日々を当たり前のものにせず、一つ一つの小さな幸せを大切に、今を生きていくことこそが「でんきが築く豊かな未来」だと、私は考える。